

こどもが まんなか いわてのWAっこ

ワクワクドキドキ!



ハンカチ上げ



すべての子どもたちと学校の
ウェルビーイングの実現
を目指して

足場かけ



いわて幼児教育センター通信

№3 令和7年7月31日発行

発行・編集

岩手県教育委員会事務局学校教育室
(いわて幼児教育センター)

本通信は岩手県 HP からダウンロード
できます

<https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/kyouiku/gakkou/1006358/1058868.html>

きらきら☆いわてっこ

いわて幼児教育センターの専門員が先月に訪問支援した園で見つけた、ワクワクドキドキな姿をご紹介します。

「遊びは学び 学びは遊び やってみたいが学びの芽」 学びの芽を育むための保育者の役割



4歳児7月

家庭用のシフォンケーキ型が砂場遊びの道具にありました。型に心ひかれた男児。さっそくケーキ作りが始まりました。土の柔らかさは丁度よく、型抜きは何度かやっていくうちにうまくいきました。保育者は、一人でどこまでできるのかなと見守ったり、時々手伝ったり・・・。

そのうち、そばにいた女兒に「手伝ってもらったら?」と声をかけると、「うん」という返事と共に、二人のケーキ作りが始まりました。あまり多くの会話は二人でしたが、型抜きの瞬間を喜び合ったり、崩れないように固めようしたり、まるでケーキ職人の共同作業のようでした。

「クリームを作りたいんだけど、先生手伝って!」と早くデコレーションしたくて仕方ない様子の男児。保育者は、クリームの材料となる石けんを細かく削る手伝いをしたり、ホイップすることを励ます声かけをしたりしていました。

何とかデコレーションするまでの段階にきて、次はトッピングです。近くにある葉っぱをとってきてクリームの上に乗せて完成!!

「お迎えにきた保護者が見える場所に置いたらどうかな」という保育者の提案に、嬉しそうにケーキを運ぶ二人の息はぴったりでした。

「おいしそう!」という、「今度は、クリームを自分でたくさん作るぞ!」と力強い意気込みが聞かれました。



(観察者の目)

4歳はなんでもやってみようと思って試す時期。でも思うようにならないこともあります。その場面で保育者のさりげないタイミングのよいかかわりが、そんな子どもたちの学びを支えています。

・ある時点で何かが「できる、できない」といったことで発達を見ようとする画一的な捉え方ではなく、それぞれの子どもの育ちゆく過程の全体を大切にしようとする考え方である。

・一人一人の子どもの可能性や育つ力を認め、尊重することが重要である。

研修の報告

7月9日（水）、サンセール盛岡を会場に、市町村幼児教育推進協議会を行いました。各市町村から約3名ずつ（教育委員会・保育行政・幼児教育施設それぞれの担当者）参加していただき、「保育の質の向上」「幼児教育アドバイザーの育成」をキーワードとした研修です。午前中の実践発表や講義をもとに、午後は各市町村の実情に応じた協議を行いました。市町村内の話合いに留まらず、他市町村を回って情報を得てくるなど、参加者の自分事としての意識が輪のように広がっていく時間でした。（また、作成済みの「架け橋期のカリキュラム」を提供いただいた市町村の皆さん、ありがとうございました。）最後は、市町村ごとに取組みたい内容を決め、実現可能性は何%かも考えていただきました。今後、幼児教育センター担当が訪問支援や研修等伺う際には、ぜひ進捗状況や悩みなどお聞かせ下さい。一緒に考えたり、情報提供したりしながら、県全体で「質の向上」「アドバイザーの育成」に取り組んでいきます。

- ・説明「本県における就学前教育推進体制」
- ・実践発表「幼児教育アドバイザー配置に関わる取組」
一戸町、金ケ崎町
- ・講義「幼児教育アドバイザーを活用した幼児期の教育・保育の一体的な推進の意義と具体的取組」
福井大学大学院 岸野 麻衣 教授
- ・協議

=====参加者のリフレクションより=====

一戸町、金ケ崎町の取組から「顔の見える関係」づくりはとても大事であると痛感した。また、岸野先生が話された「動きを作り出すこと」「誰かが仲介していくこと」について、自分の自治体では、大きな動きを作り出すことは難しさがあるが、少しずつ、しかし確実に園と学校をつないでいきたい。

子ども達を真ん中にして、大人たちがどのような「輪」を作っていけばいいのか、たくさん考えることができました。協議では、自分にはない視点があり、話したからこそ分かったことが多くありました。「輪」を作ることは、様々な立場の人たちがその立場だからこそその視点で話し合い、つながることで初めてできるものなのだと学びました。

これまで「10の姿は生活や遊びからしみ出てくる姿」であることを小学校に伝えることに難しさを感じることもあった。そのような時にアドバイザーという立場の方がいることは必要だなと思った。アドバイザーが仲介して幼小が一緒に進もうとする気流を作り、巻き込んでいく大切さを学ぶことができた。行政とも共有し、この大切さを広めていきたいと思った。

実践発表から、アドバイザーが各団体・行政間の連携を担保し、系統的な指導計画の作成支援や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の共有に寄与していることが分かった。定期的な巡回・協議の場を設けることで、アドバイザーが指導だけでなく、現場保育士との対話を通じ、質の向上に資する相談にあたっていることは伴走者としての職員支援として有効だと感じた。



他市町村の
カリキュラム閲覧



協議のようす



講師：岸野麻衣教授

コラム ～最近のニュースより～

昨今の教育現場での教職員における不適切な事案の発生により、園児の様子の撮影について配慮されていることと思います。撮影に限らず、園から発行するお便り等についても、互いにチェックし合うことが大切であると考えます。既に園でも共有されていると思いますが、次のようなことを確認してみましょう。

- （例）☐園だより等に掲載する写真に写っているお子さんの保護者から同意を得ていますか？
☐健康診断の結果やアレルギー対応など、個人が特定できる情報を不必要に載せていませんか？
☐言葉遣いは適切ですか？発行する前に文の主述などをもう一度確かめてみましょう。